

二本のレール

2021.5.25

「人生には二本のレールが必要だ。新幹線も二本のレールがあるから、どこまでも走って行ける」と言った人がいる。では、何をもって人生の二本のレールとするのか。

北里柴三郎が、悩みがあるらしいある人に、次のように言った。

君、人に熱と誠があれば、何事でも達成するよ。よく世の中が行き詰まったという人があるが、これは大いなる誤解である。世の中は決して行き詰まらぬ。もし行き詰まったものがあるなら、それは熱と誠がないからである。つまり行き詰まりは本人自身で、世の中は決して行き詰まるものではない。

この場合は、人生にとって大事な二本のレールとは、熱と誠である。きっと、今の日本人には、この熱と誠が足りないのだと思う。昔は、北里柴三郎のように、熱と誠の二本のレールをひた走った人物がたくさんいたのだろう。その人たちが、日本という国をつくってきた。

では、自分はどうなのか。以前、ある人に、高澤先生はいつも「熱く、深く、まっすぐ」ですと言われたことがある。自分ではよくわからないが、そう見えるのかもしれない。熱すぎて数々の失敗を重ねてきている。まっすぐなゆえに、誤解もされてきたかもしれない。失ったものも多い。

今の世の中、熱という話をしづらくはなっていないか。かといって、誠が十分というわけでもない。熱と誠が細いレールでは、心もとない。スピードも出せないだろう。もう少し、太く頑丈なレールにしたい。

北里柴三郎に悩みを相談したある人とは、後に京都大学の総長となった荒木寅三郎である。その荒木寅三郎が、京都大学の入学式で訓辞を行った。その一語一語に全身を熱くして聞き入る新入生がいた。後に京都大学総長となる平澤興である。平澤はこう書いている。

大正九年九月十日、それは私にとって生涯忘れえない京都大学の入学式の日である。忘れえないのは、大学の大きさでも講堂のすばらしさでもなく、総長荒木寅三郎の熱と誠に満ちた新入生への訓辞であった。総長の口から出る一語一語は、まさに燃えていた。

この訓辞は私にとって決して遠い過去のものではなく、私はさらにこれを私のからだであたため私自身の経験をも加え、その肉づけを続けて今日に至った。いわばこの訓辞は、生涯私とともにあって私を導いてくれたのである。

先生方は、目の前の生徒たちに、何かを伝えているものである。それが、荒木と平澤のような関係であれば理想的である。だが、現実はなかなかそうはいかない。何が足りないのか。熱と誠かもしれない。まずは、生徒を前にしての、保護者を前にしての、先生方を前にしての校長の話に熱と誠が足りないという現状を何とかしたい。